

# 人の喜ぶことを、喜べる人に…

副校長 細井 宏一

先日、教大協（全国教育大学教育会）総会が、お茶の水大学で行われた。その中で、いじめ問題についての講演があり、よい話を聞くことができた。

最近の傾向として「昔だったら、その程度はいじめにはならないと思えるくらいの、ちょっとした“いたずら”“嫌がらせ”が、何度も繰り返されることで、子どもの心を壊してしまう例がある」との話で、思い当たるものがあった。いじめというと、多くの子が一人の子に対して取り囲むようにして被害を与えるような印象があるが、それだけではなく、1対1の中でも起きるといのである。そしてその行為は、昔もしばしばあったことで、大人が聞いたら一つ一つは大きなことではないようにも思えることなのだが、何度も何度も繰り返されることで大きなことになる、そういったケースが増えているということだった。

附属学校でも真剣に考えなくてはならない。

本校でも最近、児童の様子の報告を聞いていると、強い悪意は無く、ふざけた感じの延長で、他人にちょっかいをだしているケースがいくつかある。その子に話を聞くと、特別に自分が嫌なことをされたからやり返しているということでもないらしい。相手が嫌がるのを喜んでいたりまではいかないのかもしれないが、気軽な気持ちでやっているようである。気になるのは、そのことで相手が実はかなり嫌がっているということに対して、あまりにも意識が低いことある。むしろ「それくらいで嫌がるなよ」といったようなことを感じさせる時もある。

前々回の号でも少し書かせていただいたが、これが、テレビ等でお笑い芸人の人がからかわれて、それをみんな笑って喜んでいるようなことの影響に思えてならない。

講師の先生は、子どもたちへのメッセージを次のように言っているとおっしゃった。

「人の喜ぶことを喜べる人になりなさい。」

そしてこうも続けられた。

「幼い子どもは、最初は人の嫌がることをわざとして喜ぶところがあるものである。決して保護者のしつけが悪いとかそういうことばかりではない。しかしながら、集団生活の中で人と関わってうまく生きていくには、人の喜ぶことを喜べる人になることが大事。だからこそ、そのことを教育する必要があるし、学校はそういう場でもあるのだ」

印象に残る言葉だった。本校の子どもたちにも伝え、互いに認め合い、「ありがとう」がたくさんあるような、安心して過ごせる学校づくりに、今後も努めていく所存である。

また、このようなとき、保護者の方にどう対応していただけるかも大事である。子ども同士のトラブルが大人同士のトラブルにならないように、くれぐれも注意して、気になるときは学校にご連絡をいただきたい。

1～3年生の遠足、4～6年生の移動教室が、お陰様で無事に終了し、大きな成果をあげることができた。今後ご理解とご協力をお願い申し上げるしだいである。